

不死の靈藥

野村胡堂

—

「親分、何うなすったんで？」

ガラツ八の八五郎は、いきなり銭形平次の寝ている枕許に膝行り寄りました。

「八か、——風邪かぜを引いたんだよ。寝ているのも馬鹿馬鹿しいが、熱が高くて我慢にも起きちゃいらねえ」

平次は手拭てぬぐいで額を縛しばって、真っ赤な顔をしてフウフウ言っているのです。

「そいつはいけねえ、悪い風邪が流行はやるんですってね、気をつけなくちゃいけませんよ」

ガラツ八は世間並の事を言いながら、平次の額へそつと触って見るのでした。

「寝込むほど患わずらったのは、六つの時麻疹はしかをやつてから、ツイぞ覚えのねえ事さ。鬼のかくらんだよ」

「岡っ引の風邪でしょう」

「ふざけちゃいけねえ、病人へからかったりなんかしゃがつて」

相当苦しそうな平次は、ツイ八五郎の軽口おうしゆうに応酬して、ポンポン言つて見たりするのです。

「からかっているわけじゃねえが、親分が患つた日にや、御府内は闇だ」

「お世辞なんか言いやがつて、馬鹿野郎ッ」

「へッ、お出でなすつたね、その威勢いせいのいい馬鹿野郎が聞きたかつたんだ」

ガラッ八てのひらは掌で、自分の額を一つポンと叩くのでした。

「呆あきれた野郎だ、見舞に来たんだか、遊びに来たんだか、わかつたものじゃねえ」

「見舞ですよ、正真正銘親分の見舞に違えねえ証拠は、この通り手土産を持って来たじゃありませんか」

「大層な口上だな、——塩煎餅しおせんべいの袋でも持って来たんだろう、どうせ」

平次は病人らしくもない元気で、続け様に八五郎をからかっております。

「どうせ——は情けねえ、見て下さいよ、梅寿堂ばいじゅどうの上菓子が一と折、灘なだの生き一本が五升」

「上菓子は解っているが、病氣見舞に酒を持って来る奴もねえものだ」

「こいつを卵酒たまござけにして飲むと、大概たいがいの風邪は一ぺんにケシ飛びますよ。尤も、親分がイヤなら、あつしが飲み乍ながら、一と晩くらいは看病してやってもいい」

「呆れた野郎だ」

平次が精いっぱい呆れ返って、八五郎の馬鹿馬鹿しさも市が栄えたわけですが、何かしら、平次の見当では、割り切れないものが其処に残っているのです。

「変な顔をするじゃありませんか、親分」

ガラツ八は狭い^{せま}裕^{あわせ}の前を合せて、平次のけげんな視線の前にモジモジしました。

「上菓子一と折に、劍菱^{けんびし}が五升——少し奢^{おごり}が過ぎるようだぜ。八、どこからそんな^{くめん}工面をして来たんだ」

「工面なんかしませんよ」

「手前^{てまえ}にしちや大した散財じゃないか。岡っ引が金を持っているなんざ、褒めたことじゃねえ、何処からそんな金を持って来たんだよ、八」

正直者の八五郎のために、平次はそんな事まで真剣に心配してやるのでした。

「何処だっていいじゃありませんか」

「宜かアないよ、まさか筋の悪い金を身につける八とは思わねえが、あとで困るほどの工面をさしちや、菓子も酒も喉^{のど}を通らねえ、白状してしまいな」

平次の調子がシンミリして来ると、ガラッ八はツイ涙ぐましい心持になるのです。

「そんな金じゃありませんよ、親分。向柳原の叔母が、——天靈様てんりようさまの御本山にお詣りをする序ついでに、西国を一と廻りして来るから、二度と江戸へ帰るか帰らないか判らない。長年溜めた少しばかりの金は、皆な天靈様に納めるが、これは、たった一人の甥おいへの形見だから、心持よく取ってくれと、器用にくれたのが五両。親分の前だが、五両と纏まとまった金を持つてみると、まことにいい心持で——」

「それは本当か、八」

話半分に聞いて、病人の平次はガバと床の上にハネ起きました。

「あれ、お前さん。そんな事をしちゃ、風邪が悪くなるじゃありませんか」

女房のお静は、お勝手から驚いて飛んで来ると、平次の身体を無理に床の中

に押込むのでした。

「本当も嘘もありやしません。費い残りつかがまだ四両と少し、こいつで何をしようかと、昨日から考えているところで」

「八、そいつは棄てて置けないぜ」

「へエ——」

「手前のためにはたった一人の叔母さんだ、間違いがなきやいいが——」

「へエ——」

八五郎の無関心さ。

二

その頃、江戸中の評判は、東両国の元町に、祈禱所きとうじよを設けている、天靈様と

いう流行神はやりがみで、誠心こめて禱いのりさえすれば如何なる難病も平癒へいゆう疑たがいなく、富貴栄達も、心のままと言ひ触ふらされました。

ツイ一年ばかり前に開いた、ささやかな祈禱さんろう所ですが、信心の善男善女絶間もなく、五両以上の喜捨をした者には、奥殿の参籠さんろうを許して、この世ながらの極樂浄土を拝ませるといふ噂。その極樂浄土の素晴しさは、嚴重に口止めされているにも拘らず、実見した人の口から伝わって、江戸中誰知らぬ者もない、大魅力だったのです。

極樂浄土は、金さえ積みばどんな凡夫ほんぶにも手軽に拝まれました。その上持っている身上を根こそぎ捧げる篤信家とくしんかは、九州にあるという天靈様の本山を拝ませた上、そのまま、極樂安樂国に大往生を遂げさしてやるというのでした。

一番先に飛付いたのは、この世の快樂に見切りをつけた人達——鰥寡孤獨かんかこどく——
——でした。夫に死別れた女房、子供に先立たれた老母、身上や健康や、希望を喪うしなつ

た若者など、金があつて希望のない人は、蜜に集る蟻ありのように、元町の祈禱所に集つて来たのです。

それは、谷中に蓮華れんげ往生のあつた少し前のこと、疑うことを知らない江戸の人達は、ささやかな天靈様の祈禱所を、またたく間に三倍五倍に拡張させ、疑ぎ懼ぐと好奇まで手伝つて、天靈様を素晴らしい魅力に拵こしらえ上げてしまつたのでした。

「そいつは大変なことになつたかも知れないよ、八」

「何が大変なんで、親分？」

八五郎の善良な心には、平次の恐怖きょうふがどうしても呑込めません。

「叔母さんが、天靈様にこつたのは、近頃のことかい」

「二た月ばかり前からですよ」

「どうかすると、二度と帰らないかも知れない」

「親分、心細いことを言っちゃいけません」

ガラツ八もすつかり脅かされてしまいました。

「叔母さんの臍へそくりはどれほどあつたか、手前てまえにや解るまいな」

「解っていますよ、目星めぼしいものを売つたりなんかして、掻き集めた金は十五

両」

「フーム」

「まだ家作かさくが二三軒、貸が二三十両ある筈だが、そいつは急には集まらねえ。旅へ出る前に、十五六両掻き集めたのが精々でしたよ」

「よくそんなに持っていたんだね、——身上を皆んな持出した人でなきや、命には間違いがないかも知れねえ」

平次は枕から頭をあげたまま、熱っぽい額を押えて何やら考えております。

「そんなに心配なことがあるんですか、親分」

と八五郎。

「叔母さんの命にかかわるほどの心配事だよ、——が、今となつては手のつけようはない。天靈様は一度洗つて見ようと思つていたが、かんじん肝心のとき風邪を引いちや何んにもならねえ」

平次はいかにも口惜くやしそうです。

「あつしじゃいけませんか、親分」

「何？」

「あつしが乗込んで行つて、叔母さんがまだいるんなら伴れて来るし、居なかつたら、世間の言うように善い事をしてるか、それとも親分の考えるように、何か悪事を企たくらんでいるか、底の底まで洗つて見ようじゃありませんか」

ガラツ八は日頃にもない意気込せんどです。叔母の先途を見届けて若もし難儀をしてゐるなら、救い出してやろうといった氣になつたのでしよう。

「その四両の金は捨てなきやならないよ、八」

「へエ——」

「ここに一両ある。手前の四両と併せて五両だ。東両国へ行って、極樂ごくらくとやらを見せて貰つて来るがいい」

「勿体ないじゃありませんか」

四両あれば——の目算もくさんが外はずれて、ガラツ八は少し憂鬱うゑでした。

「ケチな事を言うな、どうせ手前てまえの働いた金とじゃあるめえ、それんばかりの元も金で叔母さんを助けりゃ本望ほんぼうだろう」

「よく解りました。じゃちよいと行って来ますよ、親分」

ガラツ八はもう立上たてあがって、懐へ十手と手拭てぬぐいと財布さいふをねじ込むのです。

「待ちな、八」

「へエ——」

「今度は俺を当てにしぢやならねえよ、二日や三日じゃ、この風邪なほは癒なりそう

もねえ」

「そう心細いことを言わずに、親分」

「まア、聞け、——それから、十手捕縄は持って行っちゃならねえ、岡っ引と知れちゃ打ちこわしだ、——向うじゃ、手前の顔を知っているかも知れないよ」

「大丈夫ですよ、親分、祈禱所の出来たのは、ツイこの間のことだ、それに東両国は縄張りじゃないから、滅多めったにこのあ、つ、しも面を持って行かなかつたのが、今となつては強味だ」

「間違つても十手風を吹かせるな、いいか、此方から名乗りさえしなきゃ、手前を岡っ引と思うようなあわて者はねえ」

「へッ、——岡っ引とは間違えねえが、その代り歌舞伎役者と間違える」

この期ごに臨のぞんでも、ガラッ八は無駄を言つて居ります。

「それから刃物を身につけて行っちゃならねえ、ヒ首あいくちなどは以もつての外だよ」

「そんな物騒なものなんか持つちやいませんよ、腕と知恵だけありや沢山で――」

「馬鹿野郎」

八五郎は熱っぽい平次の眼に送られて、不思議な冒険の舞台に登りました。

三

ガラツ八は堅氣かたぎの職人になり済して、東両国の天靈様に乗込みました。

神田では顔の通った八五郎ですが、橋一つ越すと縄張り違いで、さすがに長んがい顔もあまり通用せず、それに、持って生れた間延まのびのした造作が役に立って、近ごろ開いた祈禱所の者などは、滅多なことでこれを岡っ引と見破る筈もありません。

どうかしたら、岡っ引と知っているくせに、甘く見て玄関せきしよの関所を通したのかもわかりません。下手へたに木戸を突いて、疑いの種を蒔まくよりは、岡っ引でも手先でも無差別に包容して、信心の力で懐柔かいじゆうする方が賢かしこいと思つたのかも知れなかつたのです。

ともかくガラツ八は、何の支障もなく祈禱所に通されました。元は見る影もない長屋だつたそうで、その後幾度か取とり改築したりしましたが、江戸中の流行神にしては思ひの外の手狭てせまな造りで、その拝殿も、充分莊嚴ではあるが、併しかし、決して度を過して華美なものではありません。

「お賽銭や奉納は大変なものだそうですが、先達せんだつ様がよく出来た方で、貧乏人ほんどこに施ほしをするから、祈禱所もこれで結構だというそうですよ」

溜りの大火鉢を囲んで信心の一人らしい中年男がそう言うのを、八五郎は鼻の穴を掘りながら聞いて居りました。

「暮し向だつて、それはそれはお氣の毒な位粗末そまつですよ、貧乏人の私共だつてあんなことはありません。雑穀飯ざっこくめしに一汁一菜じゅうさいで、どうかすると塩を嘗なめながら召し上がっていらつしやいます」

金棒かなぼうひき曳らしい女が、鼻をすすりました。

「へエ——、誰がそれを見たんで？」

八五郎は一本槍を入れます。

「お勝手もお居間も見通しですよ、嘘だと思つたら、祈禱所の裏を覗のぞいて御覽なさい」

女は少し不機嫌な様子で、紫の幕を絞しぼつた祈禱所の裏を指しました。

八五郎はフト立上がつて、祈禱所の後ろを覗くと、奥も底もないお勝手と居間があるだけ、粗末な調度の中に、二三人の若い娘が、夕食の仕度らしく身輕に立ち働いて居ります。

やがて、祈禱所の先達と言われる四十男が出て来ました。九郎次というのが俗名で、ぞくみやう 仏学も儒道も一と通りは修めた上おき一夜豁然大悟して、天靈道を開いたという人物。総髪に一種異様な法服を着け、手には中啓ちゅうけいを持っていましたが、態度が思いのほか気さくで、流行神に付きものの虚仮こけおどかしな尤もつともらしさはありません。

お神樂堂へ出て来るような、緋ひの袴はかまの少女が四人、燈明と供物くもつを持って入つて来ました。四人ともどうして選り抜いたか、採りたての果物くだもののような新鮮な娘で、そのうちの一人、すらりと背の高いのは、桃色真珠のような皮膚ひふと、漆うるしを点じたような瞳を持った少女が、八五郎の注意をグイと掴みました。

こんな清らかな娘が、樂しそうにいそいそと働いているところに、不正も暴悪もあろう筈はないと思わせたのです。

「皆の衆、今日は新しい方も多勢見えられたようだ、格別天靈様の御加護ごかごがあ

るように、御祈禱申上げよう。ズイと前へ進みなされ」

二三十人の男女を青畳の上に坐らせて、さて静かな祈禱が始まりました。

神体は、供物と花に隠れて見えませんが、七壇だんの白木の台には、十六の灯が煌々こうこうと照り渡って、縁から射し込む美しい夕陽と対照し、甘美な香煙がゆらゆらとこめる中に、九郎次先達の祈禱が始まるのです。

それは八五郎が今まで聞いた、どんなききょうもん経文よりも快適な響を持ったものでした。祈禱の続くうち、何処からともなく緩ゆるやかな楽の音が響いて、若い女の和讃さんが、静かに静かに聞えて来るのでした。

音楽も和讃も、曾かつて八五郎が聞いたことのあるような種類のものではありません。笛や三味線や太鼓といった、浮かれ調子のアルコールの匂いのするものでないばかりでなく、どうかしたら、八五郎などは、その楽器さえ見たことがなかったでしょう。若い女の顔も、御詠歌ごえいや御和讃とは、およそ見当の違った

ものです。

しかし、美しい夕陽と十六の燈明と、甘美な香の煙と、素朴そぼくな祈りと、静かな音楽は、四半刻経たないうちに、多勢の人の心をすっかり捉とらえてしまいました。信心事とは縁のない八五郎でさえ、極楽浄土とやらいうところへ行く近道は、なんかこんな長屋の奥にあるような気がしてならなかったのです。

一とわたり祈禱がすむと、先達の女房でお万という四十女が、黒ずくめの品の良い様子で、緋ひの袴はかまの少女に案内させて出て来ました。

「この上夜のお勤めに加わる方はありませんか。齋ときの料は五両ですが、それが皆んな、お困りの方の救い米になります。その功德によって、一夜安楽浄土の姿がまざまざと見られます」

お万はそう言って、多勢の信者を一とわたり眺めるのでした。その時はもうすっかり暮れて、祭壇上の十六の灯だけが、明々と神秘の光を投げかけており

ます。

お方の声にに応じて、二人の希望者が申出ました。それに続いて、

「あつしもお願い申します」

ガラツ八も、つい、役目を忘れてこう言いたい心持になります。

夜の齋ときに加わる人達は、緋の袴の少女に案内されて、祈禱所の後ろの、ささやかな家に案内されました。恐ろしく簡素な部屋が幾つかあって、それに通される信者は、もういちど齋戒さいかいをすませて、一々先達の祝福を受けて黄金こがねの杯さかずきに靈酒を一杯ずつ受けるのでした。

「これが、仙家せんけの不死の靈薬でござるよ。この一杯の靈酒を服すると、諸々もろもろの罪障を解脱し、我等の魂たましいは、汚い血肉を捨てて、生きながら浄土の法悦うを享ける。この靈酒を毎日毎夜服する者は、不老不死の飲びを受けることは疑いもない。そのためには、天靈様に一身をささげ、五慾よくを捨てて、清浄せいじょうな身にならない

ければならぬ」

九郎次はそんな事を言いながら、一杯の靈酒を一人一人に勧めるのです。ガラッ八は何の躊躇もなく靈酒の杯を傾けました。油のような酒ですが、異様な香気があつて、そんなにまづくはありません。

何処からともなく、また樂の音が湧いて、教えられた呪文をくり返しくり返し称えているうちに、大地の底へ引込まれるような、恐ろしい眠気が催します。ガラッ八は任せ切った心持でその不可抗力な眠気に身を委ねました。

四

「驚いたの何のつて、親分」

ガラッ八はここまで話して妙に擦ったい思い出し笑いをしました。

「それから何うした、八」

平次はこの話のうちから、何かしら、重大なものと、不思議な圧迫を感じていたので。

「何刻経ったか知れねえが、眼を覚して見ると——親分の前だが、あれが本当の極樂というものかも知れませんよ」

「夢でも見たのかい」

「夢じゃありませんよ、つね抓りや痛いし、食った物は腹にたまっている」

ガラッ八はその歡樂境を不器用な舌で語るのです。

方何町とも知れぬ広大な屋敷内、大きな泉水せんすいがあつて、船が泛うかんで、その船の中に、結構な女が五六人、一人は歌い、一人は踊り、三人は鳴物を受持ち、そして一番年増がガラッ八に膝枕を貸していたというのです。

歡樂の中に眼を覚したガラッ八は、朱塗の欄干らんかんをめぐらした廻廊に船をつけ

させ、女達の手車で二階の座敷の上に導みちびかれました。そこに並んだのは、美酒と佳肴かこうと数十基とも知れぬ銀燭ぎんしよくと、そして、十二三から二十五六までの一粒選りの美女が二十人ばかり。

「そいつは皆な江戸言葉かい」

「ざとことば里言葉を使わないのが不思議な位でしたよ、身み扮なりは町人風武家風、いろいろあるが、間違いもなく日本人で——」

「何を言やがる」

ガラツ八の説明を聞いただけでも、その歡樂が並大抵のものではありません。

「そのうちに夜が更けて、酒にも馳走にも飽き、思わず横になると、小女の一人在水を一杯持って来てくれた。ギヤマンに入れた何とも言えねえ匂においの飲物でしたよ、一と口に飲むと、またウトウトと眠ってしまったと思うと——」

「それから何うした」

「元の東両国の祈禱所で眼が覚めましたよ」

「時刻は？」

「朝陽が障子へカンカン当って居ましたよ。あつしはあわてて飛起きると、真つ直ぐにここへ飛んで来ましたが、緋ひの袴はかまをはいた女の子が二三人、ケロリとして祈禱所の中を掃除そうじしていた様子でした」

「フォーム」

「親分の前だが、あんな結構なお宗旨しゅうしはありませんよ。もう一度行きてえが、さて五両の工面がつかねえ」

「とにかく、祈禱所へだけは、当分顔を出すがいい。五両の工面が付いたら、もういちど位は面白い夢を見さしてやるよ」

平次はそんな事を言いながら、深々と考えて居るのです。

「それから何をやらかしゃいいんで——」

とガラツ八。

「石原の兄哥のところの、お品さんに、済まねえがちよいと此処へ来て下さるようについてそう言ってくれ」

「へエ——」

ガラツ八は魂たましいの抜けた人間みたいに、フラフラと本所へ行つてしまいました。それから二た刻あまり、石原の利助の娘——女御用聞と言われるお品が顔を出したのは、もう昼過ぎでした。父親の利助が、中風ちゅうふうで寝込んでしまつてから、多勢の子分共を指図して、お上の御用を立派に勤め、出戻りながら美しい年増ざかりを惜気おしげもなく朽ちくちさしているお品です。

「親分、風邪を引きなすつたんですつてね、いけませんねエ」

お品はお静に案内されて、慎つつしみ深く平次の枕元に通りました。

「お品さん、済まなかつたね、わざわざ呼んだりして」

「飛んでもない、親分」

「実はね、大変なことがあるんだが——」

平次は言葉少なに、ガラッ八の経験を物語りながら続けました。

「この話を聞いて何か変な気はしないかね、お品さん。近頃はあの天靈様の信心の者が、ちよいちよい行方不知しれずになるといふが——」

「それですよ、親分、私も目をつけて居ますが、家搜やさがししても先達せんだつの跡あとをつけても、怪しいことは一つもありません。手のつけようがないんです」

「祈禱所せまというのは、大変狭せまいんだそうだね」

「長屋を二軒つぶしただけのことで、あの中には池も船もありやしません」
「夜になってから人の出入りはないだろうか」

「不思議に早寝の早起きで、戌刻いっつ（八時）過ぎは戸をしめてしまいます」
「フーム」

「八五郎さんが本当にそんな大きな家へ行つたんでしょか」

お品の聰明な眼が瞬まばたきます。

「満更夢でもないらしいよ」

「何処から手をつけたものでしょう、親分」

「近所を一軒一軒風潰しらみつぶしに捜すんだね、外に術てはない」

「家の者は先達の九郎次夫婦を縛つて見ようか——つて口惜くやしがりますが、証
拠のないものを縛るわけにも行きません」

「ともかく、下っ引を十人も狩り出して、東両国一パイに網を張つて見るがい、夜中と曉方に通つたものは、犬っころ一匹逃さないようにするんだ」

風邪の床に居ながら、平次の作戦は水も漏もらしません。

五

その晩、お品は利助の子分と下つ引を総動員して、東両国一パイに網を張り
 ました。戌刻過ぎいっつに通る者は、按摩あんまも夜泣蕎麦よなきそばも、犬っころ一匹も逃さない厳
 重さでしたが、祈禱所から出た者も祈禱所へ入った者も一人もなく、極めて平
 穩な春の夜は、うらうらと明けてしまったのです。

翌日は、元町一帯一軒残らず家捜しをしましたが、これも何の変哲へんてつもありま
 せん。

三日目の晩、思案に余って東両国へ出かけたお品、一軒一軒用事を拵こしらえて当っ
 ているうち、何処の家でどう押えられたか、翌る朝になっても、姿を見せなかつ
 たのです。

ガラッ八の叔母もガラッ八自身も、それっ切り姿を見せず、お品も行方不知
 になって、平次は床の上で焼き付けられるような焦躁しょうそうに囚とらえられました。

平次の熱は相変らず高く、町内の本道（内科医）は、この風邪は性質たちが悪いから、当分外へ出ては命に拘かかわるといふ脅おどしようです。

「お静、石原の兄哥のところへ行って聞いて来い、一昨日おとといから誰も来ないのは唯事じゃあるまい」

平次は氣ばかり揉もみます。

が、その時ちようど、石原の利助の子分が、この間からの報告を纏まとめて持つて来てくれました。

「親分、八五郎兄哥は相変らず祈禱所に入り浸びたりですよ。八五郎兄哥の素姓が判つちや何にもならないから、顔を合せても口をきかないようにして居ますがね」

妙に奥歯に物の挟はさまった言いようです。

「お品さんは？」

「何処へ行ったか、まるつきり見当が付きません」

「あの辺は日が暮れてから通る者はないのかえ」

「ろくな犬も通りません、医者げんどうの玄道の外には」

「医者げんどうの玄道？」

「え、祈禱所とちようど背中合せで、川岸かしつぷちの家ですよ」

「祈禱所に近いのかい」

「背中合せといっても、町の向うと此方だから、その間に家が五六軒あるでしよ
うよ」

「フォーム」

平次は考え込みましたが、取止めたことは一つもありません。

石原の子分が帰ると、平次はお静を呼びました。

「お静」

「ハイ」

「こいつを抛ほつて置くと、八とお品さんの命が危ない、——俺の言うことを黙もくつて聞きくだろうな」

「——」

恐ろしい不安に怯おびえて、お静は夫のやつれた顔を見つめました。

「この平次は大病人だ、外へ出る気遣きづえはねえ」

「——」

「そう世間で思おもつて居ゐるのに、——八の野郎が両国へ行いつてから、変な野郎がこの路地の外をウロウロしてしてるようだ」

「——」

「俺は病人だ、その上見張みはりられている。——いいか、お静、お前は俺の代りに、東両国へ行いつて一ひとと晩見張みはりっているんだ」

「私が？」

「いやだとは言わないだろうな」

「ハイ」

外はもう真つ暗でした。

「ここには婆ばあさんがいる、俺のことは心配せずに行くがいい」

「――」

お静の遠縁とおえんの婆さんが一人、この間から来て手伝つて居るのでした。それか

ら半刻ばかりの後、春の夜風の薄寒さを、お高祖頭こそずきん巾しんに凌いで、お静はたつた

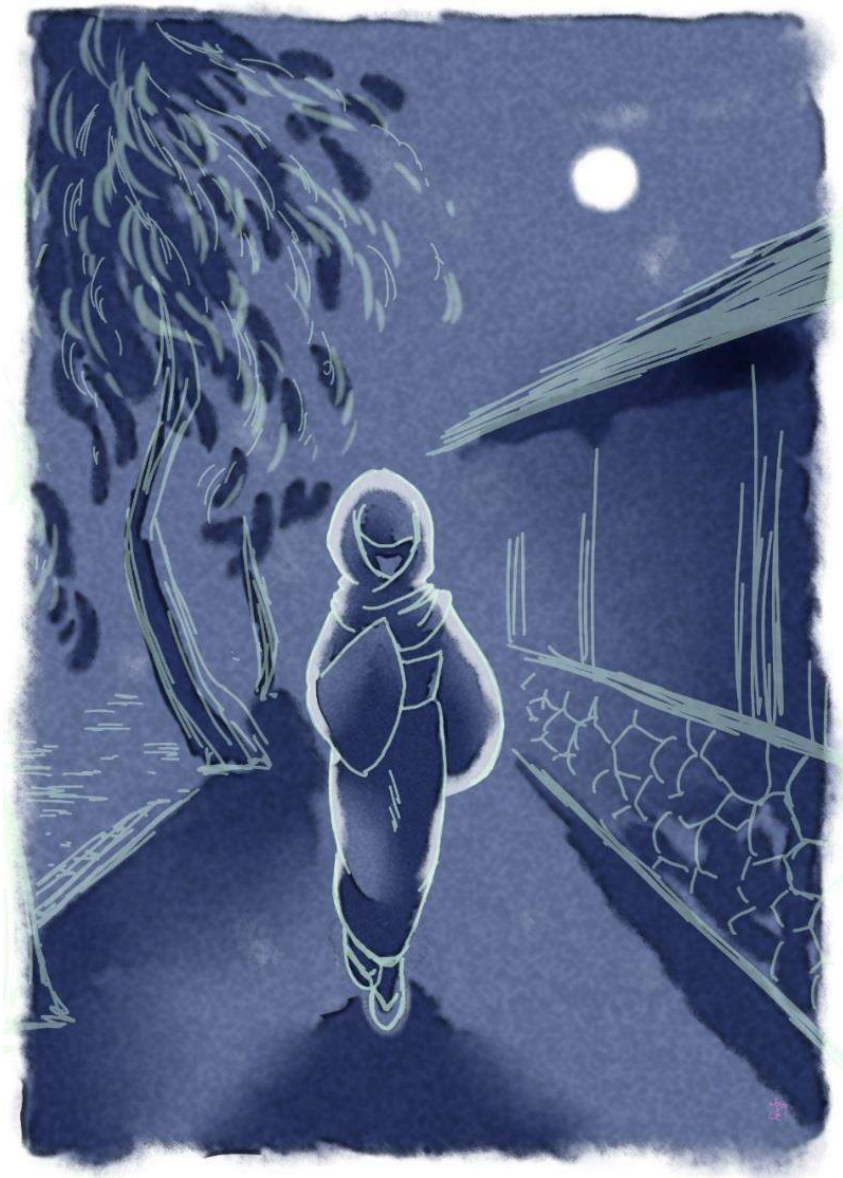
一人路地の外へ出て行きました。いつもの縞しまの袴あわせ、素足そくに草履ぞうり、若わさと軽捷けいしやうさ

は申分まわありませんが、闇やみに匂なまう艶なまめかしさは、さすがに痛々しい姿でした。

真暗な川岸かし伝いに両国へ若い女の夜道は楽ではありませんが、お静は側目も

ふらずに急ぎます。後ろからそれを追う男が一人、即つかず離れずに来るのを、

お静は知ってか知らずか別に気にとめる様子もありません。



©2017 萩 柚月

六

ガラツ八の八五郎は、近頃はもう、すっかり夢中でした。天靈様に入り浸びたつて、二度と平次のところへ帰る気さえなくなったのでしよう。時々は祈禱所に泊り込んで、掃除そうじをしたり、取次に出たりしております。

緋ひの袴はかまをはいた、四人の少女のうち、一番可愛らしいのはお蔦つたといって十八。先達九郎次の姪めいとわかりましたが、人目が多いので、うかうかガラツ八の相手になつて、話などをしては居られません。

が、この少女の美しい眼から、ガラツ八は何かしら訴えるようなものを感じました。何を一体言おうとするのでしよう。

ある日の朝、小さい庭の掃除をしていると、

「おや？」

沓脱くつぬぎの側の砂の上に、まざまざと文字が書いてあるのです。

——ここほれ、ワンワン——

お伽草紙ときぞうしの花咲爺はなさかじいの文句もんくを、ガラツ八はしはらはしばらく見詰めておりました。が、
箒ほうきの柄えを返してそつと掘ると、土の中から出て来たのは、山吹色の小判が一枚、
二枚、三枚、——数も丁度五枚、燦然さんぜんとしてガラツ八はしはらの掌てのひらに光ります。

その五両を投出して、その晩の齋ときに、ガラツ八が加わったことは言うまでもありません。

祈禱わさんや和讃わさんが済んで、裏の部屋へ行くとき、お蔭はそつとガラツ八の手に紙し片へんを握にぎらせました。開いて見ると、

——お願いだから逃げて下さい——

とたったこれだけ、顔をあげると、お蔭の美しい眼が、どこかで訴えている

のを、ガラツ八は意識しました。

が、あの池と船と、美女と、酒宴の誘惑は、ガラツ八を押し倒してしまつたのでしよう。紙片を小さく丸めて、ポンと口の中へ抛り込むと、何事もなかつたように、不死の靈酒の筵むしろに坐ります。

先達夫婦や少女達がいろいろの儀式を済ませると、黄金の杯こがねさかずきが出ました。不死の靈酒を一杯ずつ、なみなみと注いでくれます。

「おや？」

庭のあたりで、何やら大きな物音がしました。誰か往来から、石でも抛ほうつたのでしよう。が、それもほんの一度だけで、夜は水の如く静まり返ると、ガラツ八はコクリコクリと居睡りを始めました。

やがて、死んだ魚のようにガラツ八は、畳の上に眠りこけてしまつたのです。

「もういいよ」

「よし来た」

二人の男が、ガラツ八を担かつぎあげました。

「こいつは岡っ引だそうじゃないか」

「シツ」

「どうせ聞える氣遣きづかいはないよ、腐くさった鮪まぐろのようなものだ」

そんな事を言いながら、土間伝いに次の家へ、長屋のお勝手から次の家へ、またその次の家へ、——五六軒の家を黙って抜けると、祈禱所の反対側に門戸もんこを張っている、医者げんどうの玄道げんどうの家になるのでした。

家から家と伝わって、町一つ通り抜けようとは、銭形平次の考えも及ばなかったでしょう。

「駕籠は？」

「用意が出来ているよ、抛ほうり込みさえすりゃいいよ」

「心得た」

物馴れた調子で、眠りこけたガラツ八を受取った男は、入口の土間に据えた、乗物の中にそっと入れました。

「それよ」

「合点」

垂をおろすと、中には医者たれの玄道が乗っていることになるのです。石原の利助の子分が、五六人網を張っている中を、駕籠は掛声もなく、向島の方へ飛びます。

落着いた先は小梅の大きな寮、隅田川から水を引いた池の上には、見事な遊ゆ山船さんぶねを浮べて、春宵しゅんしやう一刻を惜むおしの長夜の宴えんを、昨日も今日も開いて居るのでした。

名義は日本橋の呉服太物問屋、大川屋甚兵衛の寮、下女、女中、お小間使ま

で二十八人、その大部分は川一つ隔てた里の豪勢にも劣らぬ装いを凝して、夜毎に変わる夢心地の客を迎えるのです。

ガラツ八は此処へ来ると、眼が覚めるのでした。いや、実は先刻から眼が覚めていたのです。いろいろ工夫を凝した挙句不老不死の靈酒というものを、懐中の手拭に吞ませて、恥も外聞もなく眠りこけた振りをして居るのでした。

「それ、お客様お目覚め」

立ち騒ぐ女達、船が廻廊の下に着いて、座敷の中に追い入れられると、ガラツ八はかねて見定めた廊下の闇へ、ツイと身を隠してしまつたのです。

七

「おや、お客様は？」

「たぶん御手洗おちようずでしよう」

「随分長いわねエ」

そんな噂をしている女達の声を聞いて、ガラツ八は物の蔭かげを拾いながら、奥へ奥へと入って行きました。

大方の見当はつきませんが、ともすれば人に姿を見られそうで、なかなか思うような活動は出来ません。

さんざん迷った挙句あげく、フト飛込んだのは、真つ暗な二階の納戸なんどでした。左手から射して来るのは、唐紙からかみの隙間をもれる細い細い光線あかり、——そつと手をかけて唐紙を開けると、

「おや？」

年を老った女が一人、淋しそうにお仕事をして居りますが、ガラツ八の眼には、咄嗟とっさの間にその素性が判りました。

「まア、八五郎」

「シッ、黙って、叔母さん」

八五郎は叔母さんの口を塞ぎたい心持でした。

「何だってこんな所へ来たんだい、早く帰っておくれ。私はおとなしくしてやるからいいが、お前の素姓が判ると命がないよ——」

「叔母さんを救い出しに来たんですよ、さア、早く、早く」

「だってお前、逃げる工夫なんかないよ」

「どんな事をしたって、叔母さんを助け出しますよ、さア」

八五郎は叔母の手を引くと、行燈あんどんを吹き消して、そつと部屋の外へ滑り出ました。

折柄、座敷の方では、わめき立てる女共の声々。

「お客様は居ませんよ」

「岡っ引が逃出しましたよ」

二十幾人のソプラノとアルトが、夜の空気を揺ゆるがして諸方に響ひびき渡ります。

「八五郎」

「叔母さん、大丈夫だ」

がしかし、四方の門は嚴重しまに締しまって居る上、廊下も池も、部屋部屋も、溢あふれるような光の氾濫はんらんで、身を隠かくす隈くまなどがあるうとは思われません。

「叔母さん、この中へ入いって下さい」

裏口に置かれたのは、先刻ガラッ八が送られた駕籠。

「お前は？」

「私はどんな事でもしますよ」

危あやぶむ叔母を駕籠の中に押込おむと、ガラッ八はいきなり縁の下に潜もぐり込みました。

一方は、その晩も神田の平次の家から出て来た、お高こ祖頭そ巾ずのお静きん。

両国橋の上へ来ると、後ろから、やくざ者らしい男に声をかけられました。

「ちよいと、待って貰かおうかい、お神かさん」

「」

小刻こきざみな駆け足になると、前まからも一人。

「どっこい、此方こつちにも関所せきしよがあるよ」

前後から、ヒタヒタと寄せて、後ろの男の手が、お静の襟に掛りました。

「待てと言ったら、待つものだよ」

グイと引戻す手に従って、お静の身体はドンと後ろへ——ハツと立直るところを、肩の上の曲者の手を取って、捻ひねり加減ほんじよいに一本背負ほんじよい。

「わッ」

前の男の頭の上へ、後ろの男が叩き付けられたのです。

お静は橋の上にへた張る二人の曲者に目もくれず、東両国の医者、玄道げんどうの家の前まで来ましたが、戸口とぐちに据すえてある筈の駕籠がないのを見ると、サツと向島に飛びました。

予かねて見定めて置いたものか、一気に小梅の大川屋の寮へ。

裏へ廻って、隠し木戸の上を簡単に乗越したお静、それがお静に化けた銭形平次であることは言うまでもありません。物置へ行つて、戸を開けようとして驚きました。

「おや？」

閉っている筈の戸が開いて、中に居る筈のお品が見えなかったのです。

その時、どつと起つたのは、ガラツ八を見失つた女共の声。お静に化けた平次は、あわてて物の蔭に身を潜ひそめました。

「――」

何やら、縁の下から首を出す者があります。

「八か」

「親分」

二人が互に見定めたのは、長い間に鍛錬たんれんされた勘かんだつたでしょう。

「叔母さんは？」

「助け出しましたよ、その駕籠の中で」

「そいつはいい塩梅あんばいだ、——お品ちんさんを見なかつたか」

「いいえ」

「今晚こんばんを越すと危あぶない、どんな事ことをしても見付け出さなきや」

と平次。

「もう一度入つて見ましようか」

「いや、手前てまえは叔母さんをつれて石原の兄哥あにさまのところへ行つてくれ。それから

また引返すんだ——物置の後ろに隠し木戸がある、内からなら楽に開けられる」

「大丈夫ですか、親分」

「心配するな」

平次はそのまま家の中へスルリと飛込みました。

ガラツ八は平次に教わった木戸を見付けて、駕籠の中の叔母をつれ出しました。

が、その叔母を石原までつれて行くのに、ガラツ八はどんなに骨を折ったことでしょう。一刻もかかって、叔母を安全なところへ届けて、さて引返す段になると、利助の子分は一人残らず出払って、八五郎に手を貸してくれる者もない有様だったのです。

平次は女姿のまま、暗い納戸なんどに身を潜ひそめました。家の中の騒さわぎは容易よういに鎮まりそうもありませんが、半刻ほど経つと、雨戸をバタバタと締めて、嚴重に戸締りをしている様子です。

女共は騒さわぎ疲つかれて寝てしまいました。不思議なことに、これほどの騒さわぎにも、男が一人も顔を見せないのは、一体どうしたことでしょう。

どこやらで釘を打つ音が聞こえます。不吉な予感よかんに、平次はハッと耳みみを聳そばだてました、が、釘の音は右に聞えたり、左に聞えたり、前に聞えたり、後ろに聞えたりするので、それが棺かんの蓋ふたを打ちつける音でないと解とけて、何となくホツとした心持になります。

それから半刻ばかり、彼方此方にのこる有明ありあけの灯をたよりに平次は一生懸命せきけんに捜さがしました。が、不思議なことに、ここに隠された筈のお品が、どこに居るか

影も形も見えませぬ。

「おや」

パチパチと物のはぜる音、物の焦こげる匂いがツンと鼻をつきます。

平次はもう一度ギョツとしました。奥の方から眼まなこに焼やき金を当てるような、大幅はばの焰ほのおが、カツと氾濫はんらんして来たのです。

「火事だッ」

平次は思わず怒鳴どなりました。彼方此方に寝ていた下女どもは平次の声と、焰ほのおの咆哮ほうこうに驚いて、

「あッ、た大変ッ、どうしよう」

あられもない姿の二十数人、悲鳴と共に殺到して来たのです。

平次もその人波に押されて、思わず表の方へ行くと、そっちからも一陣ほのおの焰、

——いや、それだけではありません。後ろの方の羽目も、何時のまにやら真っ

赤に焼かれて、猛火は三方から、二十幾人の女をあぶり立てるのでした。

「お品さんはどこだ、お品さんは？」

平次は手当り次第に女をつかまえて訊きましたが、驚きあわてて居るせい、一人も満足な答をしてくれる者はありません。

その上、たった一方しか開いて居ない方へ雪崩なだれを打って行った女ども、一生懸命雨戸を開けようとしませんが、どうした事か右も左も、雨戸は一寸も動かないのです。誰かが、外から雨戸を釘付けにして、三方から火を放ったのでしよう。

「已れッ」

平次は煙に巻かれながら齒齧みをしました。

「お品さん」

ただ一つの手段は、お品に返事をして貰うことでした。

「お品さん」

声を限りに呼びましたが、女共の死物狂いの騒ぎに消されて、返事があつたところで聞えそうもありません。

「お品さん、——何処だい、お品さん」

一生懸命に澄した平次の耳に、かすかに響くもの、その見当に飛んで行くと、極楽ごつこの看板にした大仏壇が一つ、その嚴重に鎖した扉の中で、何やら物音がするようでもあります。

グイと扉を引開けると、石つころのように転げ出したのは雁字がらめのお品。

「あ、お品さん」

「親分」

平次はお品を担いで女共のひしめく正面の雨戸へ——。

三方から迫る焰は、綿煙をつんざいて背を焦すばかり。

「助けてエ——」

「ヒー」

泣きわめく女共をかきのけて、平次の鉄腕てつわんは雨戸を叩き破りました。

「叩き壊すのだ、——開けようと思つては駄目だッ」

号令が一つかかると、四十幾本の手は滅茶滅茶に雨戸を叩きます。そのうち

二三枚の戸は押し倒されまして、戸と共に欄干らんかんから落ちた二三人の女は、月の

下の池の中に、水音高く沈んだ様子——。

「帯を解けッ、欄干らんかんからそれを手繰たぐつて一人ずつ降りるんだ」

平次は必死と声を絞りしぼります。が、それも無事に送れる道ではなかつたのです。

「降りて来い、一人一人、膾なますにしてやる」

抜身ぬきみを構えて、上をハタと睨にらんでいるのは、元町の医者、——愛嬌あいぎょうと世辞せじで

評判になつてゐる玄道の兇悪無慙むざんな顔ではありませんか。

「野郎ッ」

平次は懐をさぐりました。が、生憎財布さいふも何処かへ振り落したらしく、一文の持合せもありません。投銭の手を封じられると、二階にいる平次には、下で拔身を構えた玄道に向う工夫はなかつたのです。

その間にも後ろからカツと迫る焰せま。二三人の女は、平次に教わった欄干らんかんの帯を伝わって下に降りましたが、大地に足が着く前に、玄道の刃に切つて落されます。

女の悲鳴と焰の咆哮ほうこうと、血潮と、水と、火と。

「何という事をする」

平次は必死と知恵を絞りますが、一挙に二十幾人の命を救う工夫は浮びそうもなかつたのです。

油と燃え草を用意した火攻めで、火の廻りの早いために土地の鳶とびの者も未だ

来ません。いつそ、一と思いに飛降りて、一と太刀斬られながらも、女共の命を助けようか——平次はついそんな事を考えて欄干らんかんに足をかけました。

「親分、飛降りちやいけねえ」

いつの間にやって来たか、ガラッ八の八五郎の声です。

「野郎ッ」

振り返って斬下げる玄道の刃を潜くぐると、ガラッ八は後ろから無手むずと組付きました。名題の金剛力こんごうりきです。

「八、離すなッ」

「おッ」

揉もみ合う真ん中へ、平次は身軽みがるに飛降りたことは言うまでもありません。

「御用ッ」

二人力を併あわせると、玄道の刀などは物の数でもありません。押えて縛る間に、

二階のお品は自分の繩なわを解いて貰って、焰なに背を焦こがされながらも、二十幾人の女を順々に下へ降おろしました。

×

×

「親分、祈禱所きとうしよへ行きましようか」

「無駄かも知れないが、行つて見よう」

平次とガラツ八は、ちようど駆け付けた利助の子分に繩付の玄道を任せて、元町の祈禱所に向いました。

表の戸は開け放つたまま、飛込んで見ると――、

「あッ」

先達せんだつの九郎次と女房のお方は血の海の中にこと切れ、四人の少女は縛しばられたまま、虫のように顫ふるえて居たのでした。

翌る日玄道を責せめて、何もかも明あきらかになりました。天靈様を担かつぎ出して、一

と儲けしようと考えたのは九郎次夫妻ですが、それに南蛮種なんぼんだねの眠り薬を使わせ、極樂の歡樂を味あじわわせて金を絞しぼることを考えたのは医者いしやの玄道げんどうだったのです。

このからくりを嗅かぎ出しそうなのがあると、持金を悉ことごとくまき上げた上、人知れず殺して海に沈めましたが、ガラツ八と平次に本拠ほんきよを襲うわれたことを覺さとると首魁しゅかいの玄道は、九郎次夫婦と、蓄たくわえた女共を一挙に殺し、口を塞ふさいで高飛しようとしたのです。

「親分が、女に化けたのは始めてだろう。こいつは江戸中の評判になるぜ」
面白がるガラツ八、それは、何もかも片附いたある日の事でした。

「馬鹿、黙なっている。風邪が癒なおったと聞くと相手あたいが用心するから、四五日我慢して寝て居たんだ。女房に化けるより外てに術てがあるものか」

「へエ、四五日寝て居るのだけはあやかりたい位のものさ」
「馬鹿野郎、気をもみながら寝て居るのも楽じゃねえぞ」

二人は声を合せて笑いました。

「ところで親分、あのお蔦つたという娘が、あつしに逃げろと言ったのはどう言うわけでしょう」

「お前に惚ほれたわけじゃねえ、岡っ引と聞いて、子供心に叔父夫婦のことが心配になったのさ、——どうかしたらお前めえが殺されちゃ可哀想だと思つたのかも知れないよ。あの娘は良い子だ、何とか身の立つようにしてやりたいものじゃないか」

「もう一つ、小判こばんを沓脱の下へ埋めたのは？」

「——ここ掘ほれワンワンか、——ハッハッハッ、お前が毎朝働き振りを見せて、庭はを掃くのを知っていた人間の仕事さ」

平次はそう言って笑うのです。

「ところで——八」

平次は思い出したようにガラツ八の肩を叩きました。

「何で、親分」

「笹野ささのの旦那から聞いたが、今度の捕物は八五郎の手柄だから、お奉行からたんまり褒美ほうびが出るそうだよ」

「へエ」

「何に費つかうつもりだ」

「叔母へやりますよ、虎の子をなくしてしまつて、ひどくがっかりしているから」

ガラツ八はそんな事を言つて、快い心持そうにニヤニヤしました。

(注) 昔イラン国で、Hashish の製品を用い、旅人を眠らせて豪華な宮殿に伴い、極楽と称し、一夜の歡樂を尽させて布教した例があつた。一時甚しく

勢力を張り、兇暴の行いがあつたと伝えられる。フランス語の *Assassin* (ア
サッサン——殺人者、暗殺者) は *Hashish* と語源を同じゅうする。平次時
代の天靈様は蓋しその亜流でもあろうか。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「オール讀物」昭和十四年五月号 文藝春秋社

底本—「錢形平次捕物全集」第五卷 河出書房 昭和三十一年七月十五日初版

編集・発行 銭形倶楽部

不死の霊薬



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>